

総括研究報告書

主任研究者 水野正彦

本年度は昨年度の研究成果をもとに一層研究を進展させ多くの興味ある結果が得られている。特に多施設での疫学調査、最新の母児管理、治療の現況調査などはいずれもこれまで報告されてないものであり非常に貴重な資料を提供するものである。今回得られた結果は妊産婦、新生児の管理や治療指針に大いに活用されることになるであろう。

I. 諸因子の胎児に及ぼす影響に関する研究（分担研究者・一條元彦）

(i) 周産期感染症に関する研究

- ① 早産未熟児の免疫能は低くまた母体からのIgG抗体の移行も少なく、その管理に受動免疫も考慮する必要が強調された。
- ② 新生児のHerpes感染例が増加傾向にあった。特に母体性器Herpesの診断が重要であるがIgA特異抗体の検出の有用性が示された。
- ③ クラミジア感染は東京都内妊婦の4.3%にみられ、IgA、IgG抗体の増量傾向が観察された。

(ii) 各種薬剤の児に及ぼす影響に関する研究

- ① 妊娠への薬剤投与の理由として貧血（8.7%）、妊娠中毒症（4.6%）、前早期破水（2.9%）、感染症（2.1%）、切迫早産（1.7%）などが主なものであった。
- ② 薬剤投与例の奇形発生率は2.35%であったが個々の薬剤と奇形との因果関係は、結論づけられなかった。
- ③ 無痛分娩の際に用いられる薬剤を調査した。
- ④ ラットを用いた基礎実験で高血糖が胎仔骨格系の異常をきたし易いことが示唆された。

(iii) 嗜好品などの児に及ぼす影響に関する研究

- ① 受動喫煙の有害性をみるparameterとして母体尿中コチニンが有効であることを見出した。
- ② 母体尿中コチニンは児発育と相関した。

II. ハイリスク胎児の産科管理に関する研究（分担研究者・八神喜昭）

(i) 反復流産の疫学的研究

- ① 反復流産の背景因子の詳細を解析するために調査用紙を作成しそれに基き調査を行った。
- ② 後方観察で2回以上の反復流産は次の妊娠の転帰が不良であることが示された。
- ③ 前方観察により同一条件で反復流産を診断し、その予後を検討することの重要性が指摘された。

(ii) 反復流産の治療に関する研究

- ① 379例が免疫療法を施行された。
- ② 免疫療法に伴う副作用はまったく認められなかった。
- ③ 連続3回以上の反復流産を経験した例での治療成績は164名が妊娠し75%が生児を得ている。
- ④ 児の4.2%は、light for date babyであり、2例は妊娠後期胎児死亡をおこしたが本療法との因果関係は認め難い。
- ⑤ 児の追跡調査では特別な異常は得られていない。

(iii) ハイリスク胎児の治療法開発に関する研究

- ① 今後の胎児治療の対象疾患をして胎児心不全、ビタミン欠乏、血液型不適合、水腎症、水頭症、横隔膜ヘルニア、胎児水腫などがあげられる。
- ② ハイリスク胎児の血液検査の分析、胎児水腫の原因、予後調査および治療法の検討を行った。

III. 乳汁分泌確立に及ぼす母体環境因子の影響に関する研究（分担研究者・水野正彦）

1. 産科的諸因子と母乳分泌の関連に関する研究

昨年度作成した母乳調査表に基き産褥早期母乳量に影響する諸因子を分析したところ以下の結論を得た。(1)初産婦は産褥4日目までは経産婦に比して乳汁量が少ないが5日目では両者間の差は消失する。(2)初産経産とも年齢とともに乳汁量の減少傾向があり、特に30才以上だと有意に低下する。(3)妊娠前に肥満を認めた場合には乳汁量が減少し特に初産でこの傾向が著明であった。(4)妊娠中の過度な体重増加例では乳汁量が低下していた。(5)妊娠中毒症例では乳汁量は低下する。(6)帝王切開例では産褥5日目までの乳汁量は著減する。(7)扁平・陥没乳頭などでは、乳汁量は低下していた。以上、これらの結果を考慮して母乳指導を行い、また妊娠中に予防改善が可能なものは積極的に対処してゆくことが大切であろう。

2. 内分泌疾患と母乳分泌の関連に関する研究

本年度は、prolactin (PRL) 産生腫瘍 (PRLoma) 例において授乳と腫瘍の消長及び性機能予定などとの関連と、さらにPRL以外の各種内分泌疾患における授乳状態を調査した。

(i) PRLoma例の乳汁分泌と性機能予後

授乳様式が分娩後のPRL値や性機能予後に影響を与えないことが判明した。なおPRLomaは妊娠前は全例無月経であったが分娩後60%に月経の再開をみた。PRLomaは妊娠分娩後、23%が増大、54%が縮小したが授乳様式は腫瘍の消長を関連しなかった。

(ii) 各種内分泌疾患の乳汁分泌との関係

いずれの内分泌疾患も例数が少なく統計的に有意な差は見出せなかったが、傾向として以下のことを指摘し得た。(a)甲状腺機能亢進症では妊娠中に治療を中止した群で低下する。(b)糖尿病では乳汁量は低下しているが特にinsulin使用群でその傾向が大である。(c)各種排卵障害例は一般に乳汁量は低下している。(d)副腎皮質ホルモン使用群は乳汁量が低下する。

3. 新生児因子と母乳分泌の関連に関する研究

坐位分娩での乳汁量は仰臥位分娩より56%増加していた。また児体重に関しては2500g以上と2500g未満との間に統計的差異は認めなかった。母児同室群は母児異室群よりも乳汁量が増加していた。特に終日母児同室させた場合の乳汁量が最高であった。母児の接触は乳汁分泌の誘発因子であるが、特に出生直後に乳頭を含ませた例で乳汁量が増加する傾向があった。これらの結果は大変興味深い。上記の乳汁量に影響する諸因子は他の因子との関連性も否定できず今後さらに慎重に検討して行く予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



本年度は昨年度の研究成果をもとに一層研究を発展させ多くの興味ある結果が得られている。特に多施設での疫学調査,最新の母児管理,治療の現況調査などはいずれもこれまで報告されてないものであり非常に貴重な資料を提供するものである。今回得られた結果は妊産婦,新生児の管理や治療指針に大いに活用されることになるであろう。